日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
教会教育部

教会学校　教案ガイド

教師メモやメッセージアウトラインを読む前に必ずディボーションをしましょう。

1．みことば

祈りながら今週のテキスト（聖書箇所）を何度も繰り返し読んでください。また、今週の暗唱聖句を決定して、憶えましょう。

2．主題の読み取り

今週のみことばの中心テーマを自分のコトバで、1つの文章にまとめて書きあらわしましょう。

例　○：イエスさまは、弟子たちがイエスさまを救い主と信じるように
カナで奇跡を行いました。（×：カナの婚礼と奇跡）

3．教えられたこと

今週のみことばを通して、神さまがあなたに語ってくださったことを書きあらわしましょう。

4．メッセージの作成

◇「教師ノート」と「メッセージアウトライン」を参考にしてください。
◇注意深く聖霊さまの導きに従いましょう。

教会教育部公式サイト　http://ce.ag-j.or.jp/

教会の働きのためにご自由にお使いください。営利目的での使用は禁じます。
すべての内容の著作権は、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団教会教育部にあります。

教　師　ノ　―　ト

日付	2011年　8月28日
単元	基本的な教理・2
テーマ	悔改め
タイトル	救い・1　罪人が悔改めるとき
テキスト	ルカ15：1－7
参照箇所	創世記3章、イザヤ53：6、エゼキエル33：11、34：11−16、マタイ18：12-14、ルカ5：31−32

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
ルカ5：32　or　ルカ15：7

AG 日曜学校教案参照箇所　（リンクできます）

メモ(情報・例話など)

※救いの学びのはじめには、人間がなぜ救われなければならないかという学びが必要です。人間の罪について知らない人が、救いを理解することはできないからです。しかし、どんなに丁寧に罪について説明されても、人が素直に「私も罪人です」と認めることは難しいのではないでしょうか。赦されることを知らないままで、罪を認めることはできないのです。神の愛がしっかりと子どもたちの心に届き、聖霊の助けがあってはじめて、彼らは自分の罪を認め、悔い改めることができます。神は、たったひとりの罪人でも、自ら捜し求めてくださり、その罪人が悔い改めるなら最高に喜んでくださるお方です。人間の罪の問題もしっかりと教えられるべきですが、同時に神の愛もしっかりと語られるようにしましょう。

❑導入

例：イエスさまは、取税人や罪人たちと親しくされました。イエスさまは、彼らのそば近くで話をされ、食事さえも一緒にされました。しかし、パリサイ人や律法学者たちは、そのことが気に入りませんでした。彼らは、律法を守っている自分たちだけが、神さまに受け入れられるにふさわしいと思っていたからです。。しかし、イエスさまは、そんな自信満々な彼らに、例え話をして、間違いを指摘しました。

❑ポイント1　人間は、神さまからはなれてしまいました（人間の罪について）

あるところに、100匹の羊を飼っている羊飼いがいました。そのうちの1匹がいなくなってしまいました。羊は、人間をあらわしています。100匹の羊をもっていた羊飼いとは、神さまのことです。もともと人間は、神さまに造られたので、神さまのものでした。羊が羊飼いのものであるように、人間は神さまのものでした（エゼキエル34：11−16）。

羊は、羊飼いに愛されます。えさをもらったり、安全に休ませてもらったりします。それなのに、1匹の羊が羊飼いのところから、いなくなってしまいました。人間（アダムとエバ）も、はじめはエデンの園で、創り主である神さまとの自由で平和な交わりの中に生かされていました。しかし、人間は、神さまに反抗して、罪を犯し、神さまから離れてしまいました。人間は、神さま中心ではなく、自己中心に生きるようになったのです。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った」のです（イザヤ53：6）。その結果として、ローマ3：23に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とあるように、すべての人が罪人となったのです。人間は、だれでも・ひとりひとりが罪人なのです。

☞人間にどのようにして罪が入ったかについては、こひつじホームページ2011年6月27日の「人間と罪①」、同年7月4日の「人間と罪②」を参照してください。

❑ポイント2　神さまは、ひとりひとりを愛してくださっています（神の愛について）

　１匹の羊を失った羊飼いは、どうしたでしょうか。他の９９匹の羊たちを野原に残して（おそらく他の羊飼いに預けて）、１匹の羊を捜しに出かけました。羊飼いは「谷に落ちてケガをしていないだろうか」「オオカミに食べられはしないだろうか」「お腹がすいただろう」「寒くて眠れないのでは」と逃げていった羊のことを心配したでしょう。危険をおかし、時間も体力も犠牲にして、一生懸命捜しました。「見つけるまで捜し歩」いたのです。それは、羊飼いにとって、１匹１匹どの羊も大切だったからです。

　神さまは、私たちを愛してくださっています。１匹のために９９匹をおいていくなんて、不釣合いと思うかもしれません。しかし、神さまにとっては、それほどまでに、ひとりひとりが特別に大切なのです（イザヤ４３：４）。人間は、罪人です。しかし神さまは、律法学者たちのように「そんな自分勝手な罪人は、放っておけばいい」「言うことを聞かない羊が谷に落ちて死ぬのは当然の報いだ」というような非情なお方ではありません。神さまは、神さまから離れてしまったひとりの罪人を、助けるために、捜してくださっているのです。

❑ポイント3　神さまは、罪人が悔い改めることを喜んでくださいます（悔改めについて）

　羊をみつけた羊飼いは、大喜びでその羊をかついで帰り、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言います。イエスさまは、「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」とおっしゃいました。律法学者たちは驚いたでしょう。イエスさまは正しい人と一緒にいて喜ばれるのではなく、罪人がイエスさまのところに帰ってくることを喜ぶとおっしゃったのです。<u>イエスさまは、「正しい人を招くためにではなく、罪人を招いて悔い改めさせるために来たのです」</u>（「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です」ルカ５：３１−３２）。

「悔い改める」とは、罪からはなれて、神さまに立ち返ることです。私たちは、みんな罪人です。神さまに造られたのに、神さまからはなれて自己中心に生きて来ました。それを神さまに「ごめんなさい」と言って赦していただき、神さまのところに帰ることです。私たちが悔い改めるとき、神さまは、必ず罪を赦してくださいます。それどころか、大喜びで迎えてくださいます。「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ」（エゼキエル33：11）とあるとおりです。

☞悔改めれば救われるというのは、何か人間の行動が主導のように感じてしまいますが、そうではありません。悔改めは、神さまがはじめてくださった救いの働きに対する、人間の応答です。ここでは、神さまが、まず私たちを救うために、捜し求める愛を示してくださいました。救いは、神さまが主導してくださった恵みの働きであり、悔改めは、それを受ける応答の行為です。

❑結論　神さまは、ひとりの罪人が悔い改めることを喜んでくださいます

（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

　例１：まだイエスさまを信じていないお友だちへ：神さまは、あなたを特別に愛しています。あなたを捜し求めています。もともとあなたは神さまに造られました。だから神さまにとって、あなたは特別に大切なのです。あなたが、神さまのところに戻るなら、神さまは最高に喜んでくださいます。今日信じられなくても、教会に通い続けてください。自分の力で頑張って信じなくても、神さまは見つかるまで捜してくださり、肩に抱えてあなたを導いてくださいます。神さまの愛が分かったときには、素直に悔改めればよいのです。

　例２：クリスチャンのお友だちへ：もう一度、捜して救ってくださった神さまに感謝しよう。救われたことを喜ぼう。そして、あなたも、失われた魂を愛し、お友だちが救われることを、最高の喜びとしよう！お友だちや家族を導いて、救われたらホントにウレシイよ。それを体験しよう！

教　師　ノ　―　ト

日付	2011年　9月　4日
単元	基本的な教理・2
テーマ	永遠のいのち
タイトル	救い・2　命と滅び
テキスト	ヨハネ3：16
参照箇所	マタイ7：13,10：28,16：16、ヨハネ11：25-26,20：28、使徒2：24、ローマ6：23、ピリピ1：28

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
　ヨハネ3：16

AG 日曜学校教案参照箇所　（リンクできます）

❑導入

　私たちが救われるとは、どういうことでしょうか。永遠のいのちが、どんなにスバラシイものであるか、みなさんは知っているでしょうか？

❑ポイント1　私たちは永遠に滅びる者でした（第二の死について）

　私たちが「滅びる」とはどういうことでしょうか？人間の肉体は必ず死にます。しかし、聖書で言う滅びはそれだけではありません。ここでいう「滅び」とは、魂の死のことです。ヨハネの黙示録には、「第二の死」と書いてあります（2：11,20：6,14,21：8）。肉体が死んだ後、魂が「第二の死」に投げ込まれると、神さまとの関係が永遠に失われます。黙示録では、この「第二の死」は，「火と硫黄との燃える池」（21：8）、「火の池」（20：14）という表現でも書かれています。

　聖書では、生きているということは、神さまとつながっているということです。逆に神さまと切り離されている状態は命がない＝死んでいるということです。罪を悔改めないままでは、神さまとつながることはできません。「罪から来る報酬は死です」（ローマ6：23）とあるように、罪人である私たちは、罪の結果として、滅びてしまうはずでした。しかし、イエスさまが、その罪の結果としての死を身代わりに受けてくださったので、イエスさまを信じている人は、この第二の死から救われています（マタイ7：13、10：28、ピリピ1：28参照）。イエスさまは、人間がひとりも滅びないようにと、命を捨ててくださったのです。

☞神さまが私たちを地獄に落とすのでしょうか？　神は、自己中心に生きようとする人間を、無理やりに神とのつながりに引き戻すことはされません。愛の神が、人間を地獄に投げ込むのではありません。神に従うよりも、自分勝手にいきたいという人間の選択です。その結果、神とのつながりを永遠に絶たれるのです。神は、私たちのうち、ひとりでも、この「滅び」に入ることを望んでおられません（マタイ18：14）。

✎例話：人間が神さまを知らずに生きることは、まるでアリが、アリ地獄に向かって進んでいるようなものです。アリは、その先にアリ地獄があることを知らずに、行列をつくって進んでいます。人間がアリに向かって「そっちは地獄だよ」と言ってもアリには通じません。だれかがアリに変身して、アリのことばでつたえるしかありません。しかし、アリを救うために、アリの身分にまで下がりたいと思う人間なんてどこにもいません。しかし、神さまは私たちに「そっちは地獄だよ」と伝えるために、人間の姿（イエスさま）になって地上に来てくださったのです。神さまは、人間の身分にまで下がってでも、私たちを滅びから救ってくださったのです。しかも命まで捨ててくださったほどに、私たちを愛してくださったのです。

❑ポイント2　神さまは、御子イエスさまを与えてくださいました（キリストの神性について）

私たちの罪が赦されるためには、いけにえが必要でした。出エジプトの時、イスラエルの民の命が救われるために、傷のない羊の命の犠牲とその血が必要だったように、全人類のすべての罪が完全に赦されるためには、完全ないけにえが必要でした。それは、罪のない神の子イエスさまの命です（こひつじホームページ2011年5月11日「過越しの小羊」参照）。全人類の全ての罪を赦すことができるいけにえは、神の御子イエスさまの命しかありません。天のお父さまは、そのご自身にとって最も大切なひとり子の命を、罪人を買い戻す代価として払ってくださったのです。それほどまでに、神さまは罪人である私たちを愛してくださっているのです。

☞イエスさまは、生ける神の御子キリストです（マタイ16：16）。イエスさまは、神さまです（ヨハネ福音書20：28）。だからこそ、完全ないけにえとなって、私たちを救うことができたのです。次の数々の聖句が、正真正銘イエスさまが神さまであることを証明しています。

①イエスさまは聖霊の力によって生まれました（マタイ1：23、ルカ1：31,35）
②イエスさまは罪のないお方です（ヘブル7：26、Iペテロ2：22）
③イエスさまは奇跡をおこなわれました（使徒2：22、10：38）
④イエスさまは私たちの身代わりとなって十字架で死んで下さいました（Iコリント 15:3、IIコリント 5:21）
⑤イエスさまは死からよみがえられました（マタイ28：6、ルカ24：39、Iコリント15：4）
⑥イエスさまは天のお父さまの右の座に昇られました（使徒1:9,11,2:33、ピリピ2:9-11、ヘブル1:3）

❑ポイント3　神さまは、私たちに永遠のいのちを与えてくださいました（永遠のいのちについて）

イエスさまは、十字架で死んでくださり、そして、3日目によみがえられました。死に打ち勝ったのです。イエスさまは、死の支配下にはおられません（使徒2：24）。ですから、イエスさまは私たちに永遠の命を与えることができるのです。イエスさまは「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか」と言われました（ヨハネ11：25-26）。イエスさまを信じる人には、「永遠の命」が与えられます。

永遠の命をもつ人は、永遠に神さまとの交わりの中にいることができます。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」（黙示録21：3－4）とあります。肉体が死んだ後も、私たちは天国で神さまとともに永遠に生きることができるのです。

❑結論　神さまは、御子キリストによって、私たちに永遠の命を与えてくださいました

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

例1：今日のお話をきいて、永遠のいのちがどんなに大切かわかりましたか？あなたは、永遠のいのちをゲットしたいですか？イエスさまは、今あなたが信じるなら、それをくださいます。天国に行くチケットを手に入れましょう。

例2：私たちは永遠の命をいただいています。それがどんなにすばらしいことか分かりましたか？永遠のいのちを感謝しましょう。私たちを滅びから救うために、神のひとり子イエスさまが犠牲になってくださったのです。おかげで私たちは、神さまとの永遠の交わりに入れられたのです。日本ではまだ1億人以上の人が、イエスさまを信じていません。滅びに至る門は大きく、多くの人がそちらに向かっています（マタイ7：13）。それがどんなに悲しいことか、分かりましたか？あなたには何ができるでしょうか？だれにイエスさまを伝えることができるでしょうか？救いのために祈りましょう。そして、できることを今すぐ始めましょう！

教　師　ノ　―　ト

日付	2011年　9月11日
単元	基本的な教理・2
テーマ	信仰による義認
タイトル	救い・3　恵みと信仰によって
テキスト	ローマ3：23－24、エペソ2：8－9
参照箇所	マタイ20：28、マルコ10：45、ヨハネ5：24、16：8、使徒2：21、16：30－31、ローマ3：10、6：23、Iコリント1章、IIコリント5：10、ガラテヤ3：11、IIテモテ1：9、ヘブル11章、黙示録20：11-15

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
　ローマ3：23　or　エペソ2：8－9

AG 日曜学校教案参照箇所　（リンクできます）

❑導入

今日も、「救い」について、お話します。私たちは、救われるために何をしなければならないのでしょうか？

❑ポイント1　「義と認められる」とはどういうことでしょう？（義認について、ローマ3：24）

義とは、神さまの定めた律法の基準に合っていることです。私たちの心と行動が、いつも神さまの律法に正しく従っているなら、私たちは義であるということになります。そんな人はいるでしょうか？聖書は、「律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです」と言っています（ガラテヤ3：11、他ローマ3：10参照）。ルールや約束を守る正しい（道徳的な）人、やさしくて思いやりのある（人格的な）人はいるかもしれませんが、生まれてからずっと神さまの御心に従ってきたという人はいないはずです。すべての人間は罪を犯したので、神さまに背いてしまっているからです（ローマ3：23）。

「義」ということばは、裁判と関係しています。私たちは、死んだ後に、神さまによって裁判をうけます（IIコリント5：10、ヨハネ5：24、黙示録20：11-15）。その裁判で、神さまの定めた律法の基準に合っていれば義となります。義と認められた人は「第二の死」から免れます。私たちの心と行動が、いつも神さまの律法に正しく従っているなら、義であると宣告され、そうでない場合は、有罪判決を受けることになります。人間はみな罪人です。生まれてからずっと神さまの御心に従いとおした人はいません（イエスさまだけ）。ですから、私たちは、その報いとして有罪判決を受けるはずでした。しかし、イエスさまを信じる人は、最期の裁判で「義と認められ」るのです。

❑ポイント2　神さまは、私たちを恵みによって義と認めてくださいます（恵みについて、ローマ3：24）

私たちは、「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」これは、私たちはみな罪人ですが、神さまが一方的に、イエスさまの命という代価を支払ってくださったので、私たちは義（裁判で無罪）と認められるという意味です。もう少し詳しく学びましょう。

「恵み」というのは、神さまから一方的にいただく賜物（プレゼント）のことです。私たちが良いこと・正しいことをした、ご褒美でも、お返しでも、お礼でもありません。私たちが「恵みにより、・・・価なしに義と認められる」のは、神さまからの一方的なプレゼントです（ローマ6：23）。

「贖い」というのは、「買い取る」とか、「捕らわれている人を、身の代金を払って買い戻す・解放する」というような意味です。イエスさまは、ご自身が地上に来たのは、「多くの人のための贖いの代価として、自分の命を与えるためです」と言われました（マタイ20：28、マルコ10：45）。ですから、イエスさまが、代価を払って買い取ってくださったおかげで、罪人である私たちも「義と認められるのです」。

イエスさまを信じる人は、最期の審判で、義（無罪）と認められます。それは、その人が罪を犯さなかったからではありません。罪は犯したけれど、イエスさまが身代わりとなって神さまが定めた刑罰をまっとうし、罰金を支払ってくださったから、義と認められる（律法の基準は満たされている）のです。それによって、罪の結果は、一切無効になります。つまり、私たちが何かをしたのではなく、「恵みにより」、「価なしに」神さまが済ませてくださったということなのです。イエスさまの贖いの死は、私たち全人類の罪をおおうのに充分であり、罪の罰金としても充分であり、身代金としても充分でした。罪人が神さまの裁判で義と認められる根拠は、ただイエスさまの十字架の死だけなのです。

❑ポイント3　神さまは私たちを信仰によって義と認めてくださいます（信仰について、エペソ2：8－9）

では、そのようなすばらしい恵みを受け取るにはどうすればよいのでしょうか？エペソ2：8に「信仰によって」と書いてあります。救われるためには、過去の罪を悲しむだけでなく、神さまを信じる決心が重要です。また、イエスさまが十字架にかかって死んでくださったことで、私たちの罪は赦されました。しかし、それだけでみんなが永遠の命をゲットしたわけではありません。それを信じることが重要なのです。救いは、神さまからの一方的なプレゼント（恵み）ですが、私たちが手を出して受け取らないと、それをゲットできないのです。

逆に、人間がいくら努力しても、「義」と認められることはできません。どんな良い行いを積み重ねても、それによって救われるということはありません（IIテモテ1：9、使徒16：30－31）。パウロは「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです」とハッキリ書きました。

それは、「だれも誇ることがないためです。」 もし、良い行いによって救われるなら、救われている人は、救われていない人より偉いと思うかもしれません。また、「神さまはスバラシイ」とほめたたえることをしないで、自分の力を誇るかもしれません。そうならないように、信仰によって救われるようにしてくださったのです（Iコリント1章）。行いによっては救われませんが、信じる人はだれでも救われます（使徒2：21）。

☞「イエスさまが十字架にかかってくださったことにより、私たちが永遠の命を得た」ということを、すべて証拠を見せて説明することはできません。しかし、信仰とは「望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるもの」です（ヘブル11：1）。

☞信仰による救いは人間主導か？結局、信仰という「行為」で救われるのか？
信仰は、神の恵みを受け取る行為、すなわち神が主導されたことに対して、人間が応答する行為です。また、イエスさまは「その方（聖霊）が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます」とおっしゃいました（ヨハネ16：8）。人間が信仰をもつこと自体、神の恵みの働きの中にあるのです。

❑結論　イエスさまを信じる信仰によって、神さまは私たちを義と認めてくださいます。

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

例1：今、あなたも「救い」という、神さまからのプレゼントを受け取ってみませんか？そうすれば、あなたは義と認められます。天国に行くことが約束されます。ただ、それは信じる信仰によります。聖書のことが全部わかるからではなく、良い行いでもなく、ただ信じる人はだれでも救われるのです。

例2：あなたが救いの恵みを受けることができたのは、あなたのチカラではありません。あなたがどんな経緯で救われたか考えてみてください。全ては神さまがしてくださったのです。感謝しましょう。エペソ2：8－10を読みましょう。恵みによって義と認められたのですから、もう罪を犯すことがないように、かえってこれからは良い行いをしましょう。

教　師　ノ　―　ト

日付	2011年　9月18日
単元	基本的な教理・2
テーマ	子とされること
タイトル	救い・4　神さまの子とされる
テキスト	ヨハネ1：12
参照箇所	Iヨハネ3：1、ローマ8：14-17、ガラテヤ4：4、マラキ2：10、ヨハネ1：13、詩篇103：8、エペソ4：32、ローマ5：10、出エジプト4：22、エレミヤ31：9、ホセア11：1

暗唱聖句（教会で使用している聖書訳を記入して下さい）
ヨハネ1：12

AG 日曜学校教案参照箇所　（リンクできます）

❑導入

救いというのは、単に罪が赦されるだけではありません。今日は、イエスさまを信じると、神さまの子どもとされるというお話です。

※子どもたちは、「イエスさまは私たちの罪のために十字架にかかってくださった」という具合に、救いを平面的にとらえてしまいます。しかし、救いは立体的です。贖い・赦し・義認・新生・和解など、この単元ですべてを扱いきれないほど、さまざまな側面があります。

❑ポイント1　私たちが神の子と呼ばれるために、神さまはすばらしい愛を与えてくださいました

「私たちが神の子どもと呼ばれるために、・・事実、いま私たちは神の子どもです。・・御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。」（Iヨハネ3：1）。

もともと人間は神さまに造られたのですから、まさに神の子どもであるはずでした。「私たちはみな、ただひとりの父を持っているではないか。ただひとりの神が、私たちを創造したではないか（マラキ2：10）。しかし、罪の心が神さまに反抗し、その関係を壊しました。神さまの子どもであるというすばらしい特権を失ってしまったのです。

しかし、私たちが再び神の子と呼ばれるために、神さまは、すばらしい愛を注いでくださいました。その愛とは、イエス・キリストの命の犠牲です（ローマ5：8）。神さまの方から、家出した子どもを捜し、受け入れてくださり、本来の親子関係に回復してくださったのです。「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」（ヨハネ1：12－13）。

❑ポイント2　神さまは私たちのお父さんです

①神さまは単に裁判官ではありません。先週は、イエスさまを信じた人は最期の裁判で義と認められることを学びました。それと同時に、「その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権」が与えられます（ヨハネ1：12）。これは、本当にうれしいことです。なぜなら、神さまがもし、単に私たちに無罪を言い渡す裁判官だったとしたら、その時点で、裁判官の仕事は終わりです。裁判官は、私たちに無罪判決を言い渡すだけで、その後の私たちの幸せのために関わりをもってはくれません。しかし、子どもとされるということは、継続して神さまの愛と祝福を受けることができる特権です。

また、もし神さまが単に裁判官なら、神さまにとって、私たちが律法に合っているかどうかだけが問題となります。しかし、私たちは、律法の下から贖い出され、神さまの子としての身分を受けるようになったのです（ガラテヤ4：4）。父である神さまは、情け深く、心優しく、私たちを赦して下さるお方です（詩篇103：8、エペソ4：32）。お父さんである神さまは、私たちを継続して赦してくださり、平和な関係でいてくださいます（ローマ5：10）。

☞父は私たちを懲らしめることもあります（箴言３：１１－１２）。しかし、それこそ、神の愛のゆえなのです（ヘブル12：11、箴言13：24、22：15、23：14、29：14－17、黙示録3：19）。

②私たちは単に奴隷ではありません。神さまは、私たちのお父さんですから、私たちは、単に神さまの奴隷ではありません。もし、私たちが、単に代価を払って買い取られたのなら、奴隷の身分です。しかし、買い取られたと同時に、子とされたのです。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます」（ローマ14-16）。
ですから、神さまは、自由を奪うようなことはなさいません。自由に選択する権利が与えられており、自分の気持ちを、自由にお父さんに伝えることができる立場にいるのです。また、私たちを見張るのではなく、見守ってくださるのです。私たちは、神さまに従うのですが、奴隷のようにではなく、主人に対するおそれからではありません。父の愛に応えて、父に従うのです（ヨハネ14：15,21、15：14－15）。

☞「アバ、父。」とは、イエスさまが使っていたことばで、父親への親しい呼びかけです。イエスさまを信じる人は、神さまに「ねえ、パパ」とか「あのね、父さん」という感覚で呼びかけることができます。

③神さまは私たちを捨てません。神さまは、イスラエルを「わが子」と呼んでいます（出エジプト4：22、エレミヤ31：9、ホセア11：1）。イスラエル人は、何度も神さまに背き、反抗しましたが、神さまは彼らを見捨てませんでした。神さまは、イスラエルと呼ばれたヤコブに、「決してあなたを捨てない」と約束してくださいました。神の子とされた私たちは、どんなに弱くても、失敗しても心配しなくて良いのです。失敗したら叱られる、ヘマばかりしていると見放されるというような恐れを持つ必要はありません。

❑ポイント3　私たちは、神さまの相続人です

「もし子どもであるなら、相続人でもあります。」（ローマ8：17）。

相続とは、受け継ぐ人のことです。特に、親が持っている財産などを受け継ぐ人のことを相続人といいます。私たちは、父なる神さまの相続人です。神さまのもっているものを、受け継ぐことができるのです。

神さまは私たちに、御子イエスさま、永遠のいのちなど、すばらしいものを私たちにくださいます。神さまは、私たちが必要とするものは全て与えてくださいます。愛・喜び・健康・幸せ・自由・家族・友だち・知恵・みことば・御霊の実・やさしさ・素直さ・なぐさめ・輝き・将来の夢・チカラ・食べ物・おもちゃ・・・、神さまのところには、それがもう備えられています。私たちはそれらを受け継ぐ相続人です。神さまに何でもお願いすることができます。

☆天のお父さまの資産にはどんなものがあるでしょう？一緒に考えてみよう！

❑結論　イエスさまを信じると神さまの子どもとされます

❑適用　（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

例1：イエスさまを信じた人は、神さまの子どもです。お父さんと親しくなりましょう。
①お父さんの愛の中で心やすらぎましょう。決して見放すことなく、あなたの幸せを1番に考えてくださる父なる神さまに、何でもお話しよう。喜びも悲しみもどんな気持ちも全部受け止めてくださるよ。
②お父さんからたくさん学ぼう。お父さんと遊びながら色々教えてもらうように、教会や聖書と親しみ、楽しんで学ぼう。お父さんのすばらしさをたくさん吸収しよう。

例2：イエスさまを信じて、神さまの子どもになろう！イエスさまを信じている人は、イエスさまを伝える人になろう。相続人である私たちは、永遠のいのち・愛・喜びなど、神さまから受けたものを、他の人にも分けられるのです。救いを伝えて、みんな神さまの家族になろう！